



令和6年「辰年」の絵馬

清水 第二三〇号 目次

表紙題字・良慶和上筆 表紙写真・奥の院の南から三重塔を臨む(1月25日)	
愛語から始まる幸せ	清水寺貫主 森 清範 2
大西良慶和上法話「般若心経講話」②	清水寺長騰 森 孝忍 14
清水寺 長騰語り(1)	清水寺執事 大西英玄 22
活き続ける観音霊場へ	清水寺執事 森 清顕 31
『四十手深要決義』を読む 第27回	清水寺執事 森 清顕 36
随求堂・胎内めぐりと御百度まいり	
動画撮影に十年 清水寺を次世代に	
新刊日より 人間ざかりは百五歳	
新刊日より 同和園百年史	
清水寺古写真 歎声松	
清水寺大事典 その十五	
五明洞浄墨 人見少華筆「水墨菊図」	
『成就院日記』翻刻・刊行にあたって③	清水寺史編纂委員 河内将芳 62
アテルイ、モレ慰霊碑で30回目の法要	
水にゆかり キルギスから大統領夫妻来山	
日中友好45周年 日中盆栽の粹紹介	
「今年の漢字」は「税」 社会情勢反映	
乳がん啓発でピンクライトアップ	
津軽音羽会、餅米三百キロ奉納	
舞台上放水 世界遺産・清水寺守れ	
朝講座、マーケット出店者語る	
秋空の下 第11回「清水寺で世界を語る」	
内外往来	
編集後記	

愛語からはじまる幸せ

清水寺貫主

森

清
苑

元旦早々から大変な災害となっていました。能登半島地震で多くの方々が苦難の日々を送っておられます。亡くなられた方の冥福を祈るとともに、故郷の一日も早い復興を心より祈っております。

今年(たつどし)は辰年(たつどし)であります。めでたい昇り龍(たつどし)の年です。自慢するわけではありませんが、私の干支(えと)は辰であります。年男(としおとこ)ということですから、今年(たつどし)四十八歳になります。「エッ、そんなわけないやろ」とたちまちに異論(いりろん)が出(で)そう(す)です。そうですね、八十四歳(はちじゅうよんさい)です。というわけで今年(たつどし)の年賀状(ねがはせがたじょう)には大きく勢(いきほ)いよく「龍」と書(か)きました。龍(りゅう)は「翔龍(しょうりゅう)」「飛龍(ひりゅう)」という言葉(ことば)がありますように天(あま)に舞(ま)う姿(すがた)を思(おも)い浮(う)かべます。麟(りん)・鳳(ほう)・亀(かめ)とともに四瑞(しずい)とい(い)って、めでたい想像(しょうさう)上の動物(どうぶつ)であります。今年(たつどし)はコロナ禍(か)から完全(かんぜん)に抜け出(で)して、勢(いきほ)いのある龍(りゅう)のような素晴(すば)らしい世(よ)の中に

なってもらいたものだ(と)心(こころ)から願(ねが)っております。

都(みやこ)の東(ひがし)、龍(りゅう)と清水寺(しみずでら)の縁(ゆかり)

龍(りゅう)とい(い)いますと、清水寺(しみずでら)とは深い縁(ゆかり)があります。皆さん、ご存(ぞん)じのよう(に)京(きょう)都(と)に都(みやこ)が遷(うつ)されまし(た)時(とき)、この地(ち)はさな(が)ら山(さん)河(が)襟(えり)帯(たい)、すなわ(は)ち山(やま)が襟(えり)のよう(に)



法話(ほっわ)する森(もり)清(しみず)範(のり)貫(くわん)主(しゅ)

に囲んで守っていて、河が帯のように巡って流れ、自然に要害をなしている、都にふさわしい地形だといいました。そして京都は東に青龍、西に白虎、南に朱雀、北に玄武の四神が守る相応の地であると讃えられました。ですから清水寺があるところは都の東、青龍ゆかりの地なのです。そこに観音さまのお恵みの音羽の滝水が流れ落ち、夜な夜な青龍が舞い



辰年の年賀状に書した「龍」

降りて水を飲むという伝承があります。

この言い伝えに基づいて二〇〇〇年の御本尊御開帳に門前の人たちや信者の皆さんと一緒に創始しましたのが青龍会であります。もう二十年以上経過して、すっかりお馴染みになりました。龍を中心にして四天王やら夜叉神やら十六善神などが境内から門前の町まで行道ぎょうどうして、お参りの人たちの幸せや世の中の平安を祈願するのであります。いまは春三月と秋九月の十五日、それに「水の日」の四月三日に行っておりますが、私は青龍会の始まりになります奥の院の八功德水の儀に出仕して、夜叉神が洒水しやすいします功德の水を受けける役を務めております。

昨年の九月十五日は新型コロナ対策も五類になったということで、本当にたくさんのお参りの人が青龍会に来ていました。見ていましたら、奥の院の舞台が人でいっぱい龍が動く場所が少々狭くなっております。その龍を皆さんそろって、一生懸命に写真におさめていました。なんでも今年の年賀状に龍の写真を載せたいので、撮影によい場所と時間を教えてほしいという電話が寺務所にあったそうであ

ります。どうでしょうか、うまい具合に年賀状がつけられたでしょうか。

重陽の節句の沼津行き

言いましたようにコロナ対策が緩和され、山内の行事も以前の形に戻ってきました。世の中全体がそうなっているようで、人数も規模も制限のない催しがあちこちで行われています。私も例年、秋には方々で行われる講演会や記念行事などに招かれて出掛けることが多かったのですが、昨年の秋はコロナ前と変わらない感じになっておりました。青龍会の前の九月九日には静岡県沼津市に行ってきました。生涯学習であります市民大学の特別講義に来てほしいというのです。今年の市民大学は市制百周年の特別事業だといいます。

九月九日と言えば重陽の節句の日です。菊の節句ともいいますが、かつては宮中で宴うたげが催されました。菊は葉の上に置いた露を飲むと長寿になるといいう言い伝えがあり、めでたい花です。これには中国に有名な物語があり、日本の謡曲になっています。「菊

慈童」あるいは「枕慈童」といいますが、周の穆王ぼくわうに仕えていた慈童がある時、うっかり王の枕をまたいでしまい、その罪で山中に流されました。穆王は慈童をかわいがっておりましたので、流罪にあたって経文の言葉を受けたのですが、その文句を流された山中の菊の葉に写したところ、葉に置いた露が霊薬になり、飲んだ慈童は不老長寿の仙人になったという話です。大西良慶和上はよく菊の花の絵を描いておりました。そして、こんな歌を賛に書いています。

この花の露をくみても齡よわいのぶ

葉とききし黄菊白菊

こういう重陽の良い日に沼津市に招かれたわけです。「是非とも行こう」ということになったのですが、沼津には広域異業種交流の会があります。静山会といえます。もう会ができてから三十年以上になります。広域とありますが、本拠地ですから会員が多い。ではないのですが、本拠地ですから会員が多い。「せっかく沼津まで来るのなら、前の晩に歓迎会をやる」というのです。ところが、ちょうど台風13号

が接近してきました。予想ではまさに前夜の八日に沼津あたりに到達します。これでは行けない。新幹線が止まってしまいます。新幹線は停車したら、扉も開かず、ジッと動きません。また京都に戻って行くこともなく、前に進むだけの一方通行です。私は何度か三島駅あたりで足止めをさせられた経験があります。「これはあかん」と断ったのですが、「もう食事の準備から、ホテルの用意から、全部整っている。主役が来なければ、どうにもならん」といいます。仕方がないので出かけましたところ、なんと風も吹かない、雨も降らずに台風は通り過ぎました。

修学旅行生への書の贈り物

重陽の沼津行きは以上になりましたが、十日の翌朝は第二日曜定例であります清水寺仏教文化講座があり、十五日は先ほど言いました青龍会、そして十八日は洛陽六阿弥陀参りと続き、その間も来客が訪れてくるといふ具合で確かにコロナ禍の前のような様子です。

修学旅行の訪問も以前と変わらなくなりました。

御縁のある地域の学校には出来るだけ修学旅行で清水寺に来てほしいと願っているところですが、生徒たちが訪ねてきました折にはなるべく面会して交流するようにしています。去年九月の時も六阿弥陀参りの翌十九日、二十日と修学旅行生が訪ねてきました。大講堂の円通殿に迎えて、最初に短いお話をします。それから寺の案内パンフレットを全員にプレゼントするのですが、裏表紙の内側に書を一字か二字ほど書いて記念に差し上げます。生徒たちはパンフレットを開き、その字を見つめますと、「うわあ、こんな字をもらった」と言って、互いに見せ合い大喜びです。中にはどういう意味か聞いてきて、いろいろ話をしたりします。そして、書のページを開いて、みんなで記念撮影をするのです。最後は学芸の先生などに仏足石を案内してもらって交流のひと時は終わりとなります。

三十分ぐらいのことですが、清水寺の住職から書の言葉をもたらったと思ひ出になります。きっと記念になります。もらったパンフレットは大事に残しておくと思います。大人になってから、それを見て、



森貫主がひとりひとりに揮毫した書を手にした鳥取県・南部中学校の生徒のみなさん

もう一度清水寺を訪ねて来てくれます。そう思って努力しているところです。

修学旅行生が訪ねてきた二十日は、生徒が帰った後さらに続きがありました。急いで寺を出発して新幹線に乗り東京へ向かいました。実は福島県にありまず大熊町からお招きを受けていたのです。ひとまず東京に泊まって、翌朝に常磐線の特急に乗って大熊町に向かおうという行程です。

大熊町の「学び舎ゆめの森」

大熊町はご存じでしょうか。福島県の太平洋岸にある「浜通り」の町です。東日本大震災ではここにも大きな津波が襲ってきました。大熊町と隣の双葉町には東京電力の福島第一原子力発電所が立地しています。津波のために原発が重大事故を起こして、大熊町民は全員が町外に避難するよう指示されました。全町民の避難ですよ。最初は内陸部の田村市に、次いで会津若松市に避難し、町役場も幼稚園、小学校、中学校も会津若松市にできました。それから町役場の出張所や連絡所は、いわき市や郡山市にも設